



王太子妃殿下の
離宮改造計画 3

斎木リコ
Riko Saiki

RB

レジーナ文庫

登場人物 紹介

エドガー

エンゲルブレクトの友人の外交官。見た目は好青年だが、人の弱みを握るのが得意という厄介な男。

ハルハーゲン

スィーオネースの王族でもある公爵。王位に執着しているという噂があり、底が知れない人物。

ヨーン

エンゲルブレクトの副官。ザンドラにご執心で、彼女を追い回している。

リリー

杏奈の侍女。魔導の専門家でもあり、研究のためなら寝食も忘れてしまう。

ザンドラ

杏奈の侍女。暗殺者の家系であり、その技術を使い杏奈を守っている。

ティルラ

杏奈の侍女。離宮改造計画にも、杏奈の日々にもなくてはならない有能な女性。

ルードヴィグ

スィーオネースの王太子。杏奈の夫だが、愛人を寵愛している。この頃、情緒不安定気味。

エンゲルブレクト

王太子妃護衛隊の隊長。伯爵位を持つ貴族でもある。杏奈の努力を間近で見ている彼女に感情移入しつつある。

あんな 杏奈(アンネゲルト)

日本育ちだが、現在は異世界の名ばかりの王太子妃。いつも自分を守ってくれるエンゲルブレクトに、淡い恋心を抱いている。

目次

王太子妃殿下の離宮改造計画 3

7

書き下ろし番外編

美姫の館での一夜

359

王太子妃殿下の離宮改造計画
3

一 王宮大舞踏会

八月も中旬を過ぎると、スィーオネースには秋の気配が漂い始める。それはここ、ヒュランダル離宮のあるカールシュティン島でも同じだった。

「はー……いい天気ねえ……」

ノルトマルク帝国から嫁いできた王太子妃アンネゲルト・リーゼロッテは、自身がつ船「アンネゲルト・リーゼロッテ号」のデッキでくつろいでいる。ついこの間まで日本にいた彼女は、ある理由によつて故郷である日本を出て、異世界にある父の国——帝国へ戻った。そして、そこからこの国へ政略結婚で嫁いできたのだ。先日までは多忙だったが、社交シーズン終盤のこの時期、めぼしい行事は終わって、ようやく落ち着いてきている。残すは王宮で行われる大舞踏会のみだ。

デッキは護衛隊にも開放されているが、今は誰も来ていないらしく周囲に人影は見当たらない。

「アンナ様」

階段の方から声が聞こえた。姿を現したティルラは帝国からついてきた側仕えの一人で、軍人出身の有能な女性だ。

「ここよ、ティルラ。何かあった？」

「朗報です。帝国との通信が開通しました」

「本当に!？」

確かにいい報せだった。これでいつでも帝国の家族と連絡が取れる。

帝国とスィーオネースの間に通信用の中継局を置く計画は、アンネゲルトの結婚が決まつてすぐに立てられたという。用地選定やら技術的な問題を解決し、ようやく開通した訳だ。

ティルラは持っていたタブレット端末をアンネゲルトに差し出してきた。

端末には母である奈々の姿が映っており、その後ろには父アルトゥルの姿もある。

『久しぶりー。元気にしてた?』

「お母さん!」

母につられて、アンネゲルトの言葉も日本語だ。もつとも、元々船内では日本語を使う事が多かったが。

笑顔の母とは対照的に、父の方は複雑な表情だ。何かあったのだろうか。

「お父さんってば、どうしたの？」

『何でもないわよ。娘を嫁に出した事を実感しているみたい』

その言葉で帝国に戻ってすぐのごたごたを思い出したアンネゲルトは、つい拗ねた口調になってしまう。

「実感って……こっちの都合も聞かずに嫁に出したのは、お母さん達じゃない」

『しょうがないでしょー。あんたは帝国皇帝の姪で、公爵令嬢なんて肩書きを持っていてるんだから』

相変わらずああ言えばこう言う母だ。この母が、どうやって日本から異世界の帝国へ行き、公爵という身分の父と出会って結婚したのか、未だに謎である。

それはともかく、今の言い方はない。そもその原因は、母との賭けにあるというのに。そう思ってムツとしたアンネゲルトは、端末に向かい反論する。

「しょうがないでしょ！ 帝国に戻るはめになったのは、お母さんのせいじゃない！ お母さんがあんな事を言うから」

『私のせいじゃなくて、あんたの自業自得じゃない。就活で内定を一つでも取れば、あんたの勝ちだったのよ？』

アンネゲルトはぐうの音も出なかった。彼女が日本から異世界に戻った理由とは、この事だ。日本にいた時、就職活動に絡めて母と賭けをした彼女は、それに負けたせいで今ここにこうしているのだから、確かに自業自得と言えた。

「うー……で、でも！ 帝国に帰った途端、結婚話が待ってるなんて聞いてなかったんですけど！」

悔し紛れに投げつけた言葉にも、母はあっさり言い返す。

『おやー？ そっちで大分楽しく過ごしているって聞いたけど？』

「うー！」

母の指摘は本当の事だ。結婚生活自体は問題があるものの、現在のアンネゲルトは離宮の改造計画に熱中し、楽しく日々を送っている。

結婚相手の王太子には愛人がいてアンネゲルトを顧みる事はない。そもそも、結婚式当日に王宮からここ、カールシュテイン島にあるヒュランダル離宮に移るよう言ってきたのは彼だ。

とはいえ、結婚を望んでいなかったアンネゲルトにとつて、これはまさに渡りに船な状況だった。帝国からスィーオネスへ来る間も、どうやって王太子との結婚生活を避ければいいのか、そればかり考えていたほどなのだから。

荒れ果てた離宮を見た時にはどうしたものかと思つたが、今は改造計画の他にもやりたい事が見つかったし、アンネゲルトの生活は充実している。

『それに——』

急に母が笑みを浮かべ、声を潜めて画面に近づいた。その笑い方に、アンネゲルトは嫌な予感を感じる。

『そっちでいい人が見つかったんだって？』

予感的中した。にやりと笑っている母の目には、きつと真つ赤に染まった自分の顔が映っている事だろう。

「そ……ど……な……」

声が詰まって言葉にならない。母の一言にはそれほどの威力があった。

『護衛隊の隊長を務めている伯爵なんですつてね。帝国の港街と、そっちの島とで二回も助けてもらったんだって？』

『奈々、どういう事だ？ 護衛隊の隊長がアンナとどう——』

画面の向こう側で両親が言い合いを始めたが、アンネゲルトに構っている余裕はない。何故母が、護衛隊隊長であるサムエルソン伯爵エンゲルブレクトの事を知っているのか。

答えはすぐにわかった。

「ティルラ……話したの？」

「申し訳ありません」

そう謝罪するティルラは困った様子だ。アンネゲルトも、彼女には奈々達への報告の義務があると頭ではわかっている。

ついこの間自覚したばかりの淡い恋心が親に筒抜けになっている現状に、アンネゲルトは穴があつたら入りたい気分だ。

「もう、やだー……」

頭を抱えるアンネゲルトを、言い合いを終えたらしい母が宥める。

『まあまあ、詳しい事までは聞いてないから。あ、でも相談したくなったら、いつでも受けつけるからね』

「お母さんには絶対相談なんかしないもん！」

アンネゲルトは子供っぽくぶいっとそっぽを向いた。横顔に母の何とも言えない視線を感じるが、無視をする。

その後はお互いの近況を簡単に伝え合い、初の二国間通信は終了した。これからは船がスイーオネース国内における中継局の役割を果たす為、王都でも通信が可能になる。アンネゲルトの親戚で、在スイーオネース大使夫人のクロジンデも喜ぶだろう。

「思っていたより早く開通したのね」
 内容はあれだったが、家族と顔を見て話す事が出来たのは嬉しいし、いい気分転換になった。

笑顔のアンネゲルトに、ティルラも笑みを浮かべる。
 「工兵達の努力の結果です。これで帝国との連絡が取りやすくなりました。色々はかどと捗る事でしょう」

笑顔のティルラの迫力に、何がはかど捗るのかを確認する度胸はなかった。

社交シーゾンの最後を締めくくる王宮大舞踏会の招待状は、スイーオネー国内にいる貴族を対象に配られたらしい。

「大舞踏会って、随分と大がかりなのね」

執務室として使っている部屋で、アンネゲルトは改めて招待状を見ながら呟いた。公務を行うようになってからスケジュール管理などの為に、私室と同じフロアにある空き部屋を使用しているのだ。

その執務室にはティルラの他、側仕えのリリー、ザンドラがいる。今日は大舞踏会の打ち合わせの日だった。

「ザンドラには招待状は来なかったのね？」

アンネゲルトの質問に、ティルラが答える。

「ええ。男爵までの身分の者が対象のようです」

男爵以上の身分を持つていれば、外国籍の貴族にも招待状が来るそうだ。事実、ティルラとリリーにも届いている。ザンドラは騎士爵の家の娘なので、対象外なのだとか。

「招待状のないザンドラはお留守番なの？」

「いいえ。アンナ様のお付きとして同行させます。会場は無理でも、控え室までは入れますから」

今回はティルラ達も出席者なので、アンネゲルトの側に居続けるのが難しいらしい。そこでザンドラのみ、会場に入るまでは側から離れないようにするとの事だ。

——そういえば、ザンドラは暗殺者の家系なんだっけ……

以前、本人からそう聞かされた。また、彼女には港街オッターズシユタットで酔っ払いに絡まれた時や、カールシユティン島に侵入した者達に襲われた時に守ってもらった事がある。腕は折り紙付きだ。

アンネゲルトがザンドラについて考えていたところ、ティルラが呟く。

「今回は護衛隊員の多くが出席するようですから、会場での警護に少し不安があります」

すね」

「え？ どうして？ 同じ会場にいるんだから、安心ではないの？」

「彼らとて、アンナ様にへばりついてる訳にもいきませんよ。付き合いで一度や二度はダンスに参加しなくてはならないでしょう」

舞踏会なのだから、踊って社交するのが主な目的となる。その中であつて踊らないというのは、無粋ぶすいと取られて不名誉に繋がってしまうのだ。

そうなると当然、アンネゲルトの側で護衛をし続けるのは難しくなる。ただ会場そのものの警備が厳しいので、問題はないかもしれない、とティルラは続けた。

「何せ主催は国王ご夫妻ですから」

そのせいか、国王夫妻は他の舞踏会に比べて遅くまで会場にいるらしい。それもあつて、警備は他の催し物の比ではないようだ。

「本来の舞踏会はそう遅くまで開いているものではありません。ただ前にも申しました通り、大舞踏会は翌朝まで会場にいてもいい事になっていますし、実際、半数近くの参加者が朝まで会場にいるそうですよ」

「……すごい状態になっていそうよね」

徹夜てつやで踊り明かすなど、アンネゲルトは日本にいた時ですらやった事がない。徹夜てつやで

カラオケならば経験があるが、最後の方は声が出なかつた記憶がある。翌日は休日だったので家で寝続けたのも、今となってはいい思い出。

日本の事を懐かしむアンネゲルトに、ティルラは真面目な顔で続ける。

「それから、口に入れるものには気をつけてください。グラスを差し出されても、なるべく口をおつけになりませぬよう」

ティルラ達が一番警戒しているのは毒なのだとか。刺客を給仕に紛れ込ませる、もしくは給仕を買収して目当ての人間に毒入りの飲食物を渡すのは、よく使われる手口だそうだ。

大舞踏会は規模が大きいので、警護が厳しい王宮といえど、どうしても隙が生まれやすい。それはそのまま、アンネゲルトの危険に直結していた。

もつとも、アンネゲルトを殺害しようとしているのはスィーオネス国内の貴族なので、大舞踏会で狙われる確率は低い。狙うなら、もつと警備が手薄な催し物を選ぶというのがティルラの意見だった。

「とはいえ、警戒するに越した事はありません。口になさるのは控え室でこちらが用意した物のみにしてください」

「わかつたわ」

自衛も大事だ。アンネゲルトもこんな年齢で死にたいとは思わない。本来なら会場で供される飲食物に口をつけないというのはマナー違反になるのだが、事情が事情だから見逃してもらおう。

「さて、では次は衣装ですね。アンナ様のドレスはどれになさいますか？」

いきなり話題が変わった。大舞踏会はシーズン締めくりという事もあって、皆が装いにこれでもかと金をかけるといいう。立场上、アンネゲルトも手を抜く訳にはいかなかった。

「選ぶのも一苦労ね」

アンネゲルトはそう言いながら、タブレット端末に表示された大量のドレスの写真を眺める。実物を広げる手間が省けるので、アンネゲルト本人よりも用意する小間使い達に好評のシステムだった。

「これなんかどうかしら？」

「少し色が暗くありませんか？ この色ですと晩餐会向きかと」

「んー……じゃあこっちは？」

「こちらは少々作りが地味ですね」

アンネゲルトが選ぶドレスは、どれもティルラのお眼鏡にはかなわないようだ。彼女

から示されたキーワードは、「豪勢しょうせいに、だが下品にはならず」というものだった。それを念頭に置いて探しているのだが、先程からだめ出しされてばかりいる。

「もう面倒だからティルラが決めてちょうだい」

「いけませんよ、アンナ様。ドレスを選ぶのも貴婦人の仕事の一つです」

ティルラが言うには、装いを凝こらして社交の場に出る事は、アンネゲルトの仕事なのだそう。その為に自身を着るドレスを選ぶのは、立派に仕事の範疇はんしゅうだと彼女は続けた。

「特にアンナ様は、実情はどうあれ王太子妃であり、宮廷でも王后陛下に次ぐ地位の女性なんですから。ご自身が社交界のモードの最先端を行く、くらしいの気構えでいらっしやらないと」

無茶を言う。傲慢ではないが、アンネゲルトは日本にいた時でさえ服選びを友達に手伝ってもらっていたのだ。

「でも、さつきから私が選ぶのは全部ダメって言うじゃない」

「アンナ様、日本語が出ていますよ。ここにはリリーもザンドラもいるんですから」

アンネゲルトは唇をむうっと子供のように尖らせて黙り込む。不機嫌になるとよくやる癖だ。

ティルラの言にも一理あるのはわかっていて。帝国でも、伯母おばにあたる皇后シャルロッ

テが相応しい装いをし、女主としてそつなく皇宮を切り回していたのを見ている。手本にすべきは彼女なのだろうが、どう考えても自分があのレベルになれるとは思えない。何せシャルロットは、ロンゴバルド王家の王女だったのだ。それと比べてアンネゲルトとはというと、半分は帝国皇帝の血を引くが、もう半分は日本の庶民の血を引き、しかも日本で庶民として育っている。当然、受けてきた教育の質が違った。

「素養の問題もあると思うのよ……」

「教師役を務めた一人として、その辺りについては問題ないと自信を持って言いますよ」
 テイルラによれば、帝国と日本を結ぶ「館」での教育で、貴婦人として必要な素養はしつかり身につけているとの事だ。確かに子供の頃からあれこれ教えられてきたが、やはり実感が湧かない。

とはいえ、目の前のドレス選びからは逃れられないのだから、何とかする以外になかった。こうなったら強行突破しかない。

「決めた！ これにする！ 反論は聞かない！」

そう言ってアンネゲルトがタブレットの液晶に表示させたのは、黄色地に赤と濃いピンクの花模様を散らしたドレスだ。大きく広がった三段重ねのオーバースカートは、若々しく華やかだった。

「ああ、それでしたら問題はありませぬ」

「え？ そうなの？」

てっきりまた反対されると思っていたアンネゲルトは、拍子抜けしたような表情でテイルラを見る。

テイルラはにっこりと笑って続けた。

「では、次はアクセサリーを選びましょうか。当日の髪型は普段通りになさいますか？」
 やっとドレスが決まったと思ったら、次が待っていたようだ。アンネゲルトは天井を見上げながら溜息を吐いた。



大舞踏会に向けて大わらわなのは、アンネゲルトだけではない。護衛隊員達の大半も同じような思いをしていた。

「やべ、靴をどこにやったっけ？」

「うお！ 上着にカビが!!」

「シャツが染まつてる!!」

このように騒いでいる面々には男爵家出身の者が多い。子爵位以上の家、もしくは裕福な家の者は、実家から連れてきた従卒が万事準備を整えていた。

先日起こった狩猟館爆破炎上事件により、王太子妃護衛隊はアンネゲルトの船に迎え入れられている。この大騒ぎも、船の中でこの事だ。

「隊長の支度はよろしいんですか？」

執務の途中、エンゲルブレクトにそう聞いたのは副官のヨーンだ。彼も伯爵家の嫡男として大舞踏会に出席する予定だった。

自身が伯爵家の当主であるエンゲルブレクトは、他の社交行事からは逃げられても、シーズン最初と最後の大舞踏会は欠席が許されない。サムエルソン家は伯爵位の中でも上位になる為、厳しい制約があるのだ。

「支度は家でやっているはずだ」

エンゲルブレクトの両親は既に亡く、父の代から勤めている家令が家の全てを取り仕切っている。その家令から先日、舞踏会の準備が整った旨を知らせる手紙が届いていた。

「同伴者はどうなさるんですか？」

珍しい事を聞いてくる、と思いつつ、エンゲルブレクトはヨーンの顔を見た。ヨーンは相変わらず考えの読めない無表情だ。

「別に、大舞踏会は同伴者がいなくとも出席出来るだろうが」

「そうですね……」

暗黙の了解として、舞踏会には既婚者ならば伴侶を、独身ならば家族を同伴者として連れていく場合が多く、独身者同士の組み合わせは少ない。

特に女性の場合は、家族以外の男性と出席すると陰であれこれ言われる対象になる。

いわゆる身持ちのよくない娘とされるのだ。

通常の舞踏会ならともかく、王宮大舞踏会は同伴者なしでも出席出来る事はヨーンも知っているはずなのに、どうしたのだろうか。まさか――

「お前……侍女殿に無理強いするのはやめておけよ」

「やはりいけませんか？」

「当たり前だ！」

どうした事か、ヨーンは王太子妃の侍女の一人、小柄なザンドラを非常に気に入っている。彼女は実家が騎士爵だそうで、今回の大舞踏会には出席出来ない身分だった。

その彼女を、招待状のいらない同伴者として連れていこうと思っていたようだ。それもあって、エンゲルブレクトに同伴者の事を聞いたのだろう。

「何度も言ったが、本気ならまずは相手の警戒心を解く事から始める。遊びのつもりな

ら早々に諦めるんだな。相手が悪い」

ザンドラは、王太子妃が自国から連れてきた侍女である。これがスイーオネース国内で雇い入れた侍女ならまだしも、帝国出身では分が悪すぎて遊び相手には向かない。

「では時間をかける事にします。それも楽しいでしょう。狩りは仕掛けを作るのも醍醐味の一つですし」

エンゲルブレクトの忠告を受けて、ヨーンは殊勝に答えた。最後の一言は小声だったせいも聞き取れなかったが、どうも不穏な言葉を言っていた気がする。

「……今、何か言ったか？」

「いえ、何も」

囁くヨーンを睨みつけるものの、その程度で口を割るような可愛げのある副官ではない事など、エンゲルブレクトも骨身に染みて知っていた。

有能ではあるが性格に難ありとして、あちこちの上官を渡り歩いたヨーンだ。一番長くついているのがエンゲルブレクトの下である。

「とにかく、彼女に関しては慎重に行動するように。もし不埒な真似をして、それが妃殿下に知られれば、お前だけでなく護衛隊員全員がこの寒空の下、船から追い出されかねないからな。そうなたら原因はお前だと全隊員に告げるぞ」

「肝に銘じておきます」

疑う気持ちはあったが、隊員全員に恨まれてまで我を通すほど愚かではないだろう。エンゲルブレクトはそう判断する事にした。彼はふとアンネゲルトについて思い出し、考え込む。

—— 同伴者か……

本来、王太子妃であるアンネゲルトの同伴者は夫の王太子だが、彼は自分の妃に見向きもしない。

また王太子妃の方も、その事を気にしている様子はなかった。政略結婚などこんなものかと思うものの、楽しそうに離宮の修繕を進める王太子妃を見ると、何か違う気もする。

—— 妃殿下は、今の状況を喜んでおられるのか？

時折そう感じるのだ。偏見を持ちたくはないが、やはり異世界で育った方は普通と違うのかも知れない。

「関係ないか」

「何か仰いましたか？」

「いや、何でもなし」

まだ部屋にいたヨーンに聞かれて、今度はエンゲルブレクトがそう答えた。いずれにしても、エンゲルブレクトが思い悩む事ではない。

大舞踏会までは、王太子妃の外出はないと告知されている。護衛隊員達も、目の前に追った大舞踏会の準備に追われる者が多い。

おかげで、しばらくは殺伐とした事を考えずに済む。エンゲルブレクトは窓からの景色を眺めながら、ちよつとした骨休めを楽しむ事にした。



スイーオネースの王宮内は、近々催される大舞踏会の準備で忙しそうだった。使用人達や大舞踏会の担当者が出ているせいも、会場の大広間だけではなく、王宮全体が慌ただしい雰囲気にも包まれている。

その中を、エーベルハルト伯爵は悠然と歩いていた。帝国大使である彼は、一日の大半を王宮内で過ごすのだ。

「伯爵」

廊下を歩く彼を背後から呼び止める声があった。振り返ると、国王の従兄弟に当たる

ハルハーゲン公爵である。

「これは公爵閣下、ご無沙汰いたしております」

ハルハーゲン公爵と会うのは、アンネゲルトが初めて参加した夜会以来だ。色々とよくない噂のある人物だが、独特の人脈を形成している為、無下に扱う事も出来ない。

そうでなくともエーベルハルト伯爵は帝国大使として、スイーオネースの王族である彼とはそれなりの付き合いをする必要がある。そこに個人的感情を介在させてはならなかった。

「伯爵も大舞踏会に参加するのだろうか？」

「ええ、もちろん。ご招待いただいていますので、妻共々出席させていただきます」

大舞踏会は外国籍の者にも招待状が配られる。エーベルハルト伯爵以外にも、スイーオネース国内にいる帝国貴族はほとんどが招待されていた。伯爵は言葉を続ける。

「公爵が同伴者をどなたにするか、巷の噂になっていますね。引く手あまたでしょう」

「いやいや、さすがに大舞踏会はねえ」

ハルハーゲン公爵は苦笑しながら答えた。女性を同伴しただけで即婚約かと言われかねない場だ。下手な真似はしないという事らしい。

三度の結婚話が流れた公爵は、今ではすっかり独身を謳歌しているようだ。

——もしくは……遊んでいる風を装っているのか？

この公爵にそんな必要があるのか疑問に思うが、何分、目の前の人物は底が知れない。「時に」

エーベルハルト伯爵がらちもない事を考えていたところ、公爵が話題を変えた。

「妃殿下も当然、ご出席なさるのだからね？」

「ええ、そう聞いておりますよ。嫁がれて初めての大舞踏会ですからね。準備が大変なようです」

つい先日、アンネゲルトが愚痴をこぼしているとティルラから聞いたばかりだ。帝国皇帝の姪姫は華やかな場を苦手としていて、その準備はさらに苦手らしい。

「殿下は妃殿下のエスコートをきちんと出来るのかな？」

「さあ、さすがにそこまでは……」

公爵の揶揄に、エーベルハルト伯爵は苦笑で返したが、内心では「出来ないだろう」と思っている。

先日設けられた王太子妃への謝罪の場でも、あからさまにアンネゲルトを睨んでいたルドヴィグだ。いくら父である国王に言われたところで、アンネゲルトのエスコートをするとはいえない。前回の夜会もそうだった。

結婚祝賀の舞踏会での非礼はなかった事にされたが、ルドヴィグ自身が反省していない以上、これからも同様の騒動が起こるだろう。その時にスィーオネースがどう対応するのか。

——見物だ。

底意地悪くそう考える伯爵は、表向きは人のいい笑みを浮かべていた。

伯爵の横顔を見て、公爵はくすりと笑う。

「随分と楽しそうだね、伯爵。何かいい事でもあるのかな？」

「さて……とりあえずは大舞踏会が楽しみですし、と言っておきましょう」

「そうか。私も楽しみにしているよ。妃殿下と一曲くらいは踊れるかもしれないからね」その一言に、エーベルハルト伯爵は「おや？」と公爵の顔を眺めた。

ハルハーゲン公爵がアンネゲルトと面識があるのは、妻のクロジンデから聞いている。先にあつた園遊会で、クロジンデが席を外した隙に出会ったらしく、妻がぶりぶり怒っていた。

その後も、音楽会などの社交場で顔を合わせているという情報を得ている。お互いに社交界の一員なのだから、シーズン中に催し物の場で会うのは普通の事だった。

だが、先日の夜会でのハルハーゲン公爵の態度を見るに、それだけではない気がする。

まさかとは思いますが、彼はアンネゲルトを気に入ったのだろうか。そう考えたエーベルルト伯爵は、改めてハルハーゲン公爵を見た。

年齢差は、親子ほどとまではいかないが十歳以上はある。しかも、アンネゲルトは王太子妃だ。いくら社交界では人妻との恋愛遊戯ラブゲームが盛んとはいえ、王太子妃に手を出せば王族の公爵といえども無事では済むまい。

後腐れない相手とばかり浮き名を流してきた公爵らしからぬ言動だ。何か裏があるのだろうか。

「どうかしたかい？ 伯爵」

「いえ……アンネゲルト様のダンスは見た事がないもので」

伯爵は、暗にアンネゲルトは舞踏会で踊らないかもしれないとほめかけた。しかし、公爵はそれを軽くいなす。

「ダンスは貴婦人の教養だ。それに、大舞踏会で踊らないという事はないだろう」

「残念ながら、我らの姫君は異世界でお育ちになられましたから」

伯爵の返しに、公爵は一瞬鼻白む。アンネゲルトが異世界人の血を引いていて、異世界で育つたという話は秘密でもなんでもない。彼女が何か常識外れの真似をしても、「異世界育ちだから」で誤魔化せるのは楽だった。

もっとも、異世界でも貴婦人教育は行われていたと聞いている。教師の一人は側仕えとしてついているティルラだ。ダンスも、問題なく教え込まれているはず。

大舞踏会において王族は、一度は必ず踊る事になっている。それはアンネゲルトも知っているから、今頃は必死にダンスの練習をしているかもしれない。

彼女の事だ、義務を果たした後はクロジンドとおしゃべりに花を咲かせると思われるが、そこまでは伯爵も関与するつもりはなかった。

伯爵の思いを余所よそに、公爵は元の調子を取り戻して言い出す。

「妃殿下のお妃教育は始まっているのだろうか？ なら問題はないさ。ダンスの相手が一人居だけとは限らないし、相手が殿下のみというものもないだろうね」

つまり、自分にも可能性はあると言いたいらしい。さて、どのような結果になるのやら。公爵と別れたエーベルルト伯爵は、二、三度頭を横に振って、先程までの思考をふるい落としした。



その日、船内には朝からそわそわとした空気が流れていた。社交シーズン最後の日、

大舞踏会当日である。

開始は十八時からで、それまでには王宮に入っていないなくてはならない。さらに、アンネゲルトはこの日、結婚以来数えるほどしか顔を合わせていない王太子との話し合いをするようになっていた。そのため早めに王宮に入るよう、話し合いをセッティングしてくれたアレリド侯爵夫妻に言われているのだ。アレリド侯爵は、魔導技術を積極的に取り入れんとする革新派をまとめる人物である。その妻である夫人は、社交界でも広い人脈を持っていた。

いつも通りの時間に起床したアンネゲルトは、朝食を食べた後にティルラ、護衛船団のエーレ団長、エンゲルブレクトらと警護に関するミーティングを行っている。場所はアトリウムにあるラウンジだ。

「お支度は王宮ですとして、こちらを出るのは十四時でよろしいですね？」

ティルラの言葉に、アンネゲルトは短く頷く。

「ええ」

アンネゲルトのいるカールシュティン島から王都へは、船で三十分ほどだ。王都の港から王宮までの時間を考慮して十四時発とした。ちなみに、大舞踏会は終了時間があつてないようなものだが、アンネゲルトは二十二時までに退出する事になっている。

本日はティルラとリリーがほぼ行動を共にする予定だ。さすがにダンスまでは同行出来ないが、それ以外の場では二人から離れないように言われている。

「今回の大舞踏会は参加人数が多いですから、はぐれてしまわないようお気をつけください」

「ティルラ……子供じゃないんだから」

「オッタースシュタットで迷子になられたのは、どなたですか？」

アンネゲルトはぐうの音も出なかった。スイーオネースに嫁よめぐ為の旅の途中、港街オッタースシュタットで迷子になったのは事実だ。

その際に酔っ払いに絡まれたのを助けてくれたのが、王太子妃護衛隊長であるサムエルソン伯エンゲルブレクトなのだから、縁とは異なるものである。

「護衛隊では、それぞれ大雑把おおざっぱに担当区域を割り振っています」

当のエンゲルブレクトはそう言つて、大舞踏会の会場になる大広間の図面を出した。

護衛隊員の中で大舞踏会の招待を受けているのは約半数であり、その人員で会場での警護を行う事になっているのだ。

「一区域を三人で担当し、妃殿下から目を離さないようにします」

「でも、隊員の人達にだって付き合があるんでしょ？」

アンネゲルトの言葉に、エンゲルブレクトは心配いらないと微笑む。
「各々、実家を通じて職務中である事を通達済みです」

護衛隊員は普段カールシユティン島にこもっているもので、付き合いのある家の者がここぞとばかりに話しかけてくる可能性がある。その為、事前に手を打っておいたそうだ。エンゲルブレクトは、続けて今日の注意事項を口にする。

「王宮でも会場の警備を固めています。油断はなさらないでください。我々も気を引き締めておきます。また、庭園は手薄になりがちですので、お出にならないでください」
「はい」

簡単な確認事項だけと思われたミーティングだったが、雑談が交じり始めた途端、おかしな方向に向かった。原因となった発言の主はエーレ団長である。

「時に姫様、本日夫君と話し合いだそうですね」

「ふくん？」

一瞬、何の事だかわからなかったものの、しばらく頭の中でこねくり回した結果、あの単語と結びついた。書類上の「夫」の事である。

「ああ、王太子……殿下と、ね。ええそう。アレリード侯爵夫人が取り持ってくれたの」
微妙に言いづらそうにしているのは見逃してほしい。

そういえば、大舞踏会の前にそんなイベントもあったなあ、とアンネゲルトは思い出す。一応言いたい事はまとめたけれど、果たしてあの王太子が聞く耳を持つてくれるだろうか。

アレリード侯爵夫妻の顔を立てて話し合いの場には来るはずだが、いつも通りこちらを拒絶する態度を取られたら、反発せずに冷静に話せる自信がない。

——まあ、それでもいいか。とりあえず言いたい事は言っておこう。侯爵夫妻が同席してくれば、いい証人になるかもしれないし。でも……

果たして婚姻無効を目指している、というのをスィーオネス貴族の前で言ってしまうといいものかどうか。さらに、いずれ帝国に帰るつもりでいるなどと言った日には、どんな反応があるかわからない。

気にしているのはあくまで侯爵夫妻で、王太子ではなかった。

「どうかなさいましたか？ アンナ様」

「え？ あ、ああ。何でもないの。どう言えば相手に伝わるかしら、と思って」
ティルラにそう答え、アンネゲルトは前に座るエンゲルブレクトをそとと窺う。

この国は想像していたより過ごしやすい為、帝国に帰りたと思う気持ちは大分薄らいでいる。苦手な社交では未だにまごつく事も多いが、クロジンデやアレリード侯爵夫

人といった味方が助けてくれた。

それに何より、ここには彼、エンゲルブレクトがいる。帝国に帰ってしまったては、もう二度と会えなくなってしまうのだ。とはいえ、まだ自分の感情を自覚した段階であつて、相手の気持ちは確認していない。

アンネゲルトが考え込んでいる間にも話し合いは進み、最終的にティルラの言葉で締めくくられる。

「では、以上でよろしいですね？」

反論をする人は誰もおらず、その場は解散となつた。アンネゲルトは溜息を吐きながら部屋を出る。

自分が王太子妃という座に居続ける以上、この恋は前途多難だつた。

昼食を食べた後は、アンネゲルトとティルラ、リリーの女性三人は支度に追われた。

入浴してから髪を結び、下着を整え、ドレスを着て化粧を施し、アクセサリーを身につける。船が王都の港に到着するまでに全ての支度を終えられたのは、手慣れた小間使い達の連係プレーがあつたからこそだつた。いつの世も、女性の支度には時間と手間がかかるものだ。

ただし、今着ているものは本番用ではなく、あくまで王宮に向かう為のドレスだつた。本番用のドレスと小物は全て王宮に持ち込み、あちらで整える手はずになつている。

「ありがとう、みんな」

アンネゲルトは手伝つてくれた小間使い達に礼を述べる。綺麗にお辞儀を返す小間使い達の顔には、仕事をやりきつた達成感が滲んでいた。

そこへ、自身も支度を終えたティルラが扉を開けて入ってくる。

「アンナ様、お支度は調いましたか？」

「ええ」

「船がそろそろ港に到着するようです」

船底の車庫までは、リリーも含めた三人での移動となつた。その途中、乗り心地の事や馬によって速度に違いが出るなど、馬車に関する話で盛り上がる。

「いっそ、馬車に見せかけて動力源は別にしてしまえばいいのに」

「それ、どんなハイブリッドですか……」

アンネゲルトの思いつきにティルラがげんなりしつつかうと、リリーが反応した。

「はいぶりつど、とは何ですか？」

無邪気に聞かれたが、アンネゲルトは咄嗟に答えられない。車の説明などでよく耳に

する言葉だが、実際にどういいう意味なのかと問われると、知らない事が多くて説明に困る。代わりに答えてくれたのは、ティルラだった。

「異なる要素を混ぜ合わせたり、組み合わせたりしたものを言うのよ」

ふんふん領きながら聞いていたリリーが、さらに質問を飛ばす。

「具体的には、どのような使われ方をしているのでしょうか？」

「ハイブリッド車という、電気とガソリンを利用した車があるわ」

ほう、と感心するリリーに、アンネゲルトはそういえば、と言葉をつけ足した。

「こちらでいうと、魔力でも電気でも動く道具は、ハイブリッドと言っていいんじゃないかしら」

帝国には魔力を電力に変換する技術がある。それらを使って、日本から持ち込んだ電化製品を使えるようにしようという取り組みが行われていた。

これにはリリーの実家であるリリエントール男爵家も関わっていたとの事で、彼女はすぐに理解する。

「なるほど、あれをハイブリッドと呼ぶのですね！」

「えーと、ちよつと違うかも……」

とはいえ、これ以上はうまく説明出来ず、アンネゲルトは苦笑するしかない。

この時の会話が後に多くの命を救う事になるとは、誰も予想だにしていなかった。

王宮までの馬車はアンネゲルトだけ別になる。周囲を騎馬で固めるのは、大舞踏会に出席出来ない護衛隊員だ。

常に護衛の場にいたエンゲルブレクトも、今日は出席者なので加わっていない。彼との合流場所は舞踏会の会場である大広間だった。

王宮に到着したアンネゲルトは、ティルラとリリーを従えて案内されるまま王宮の中を進んでいく。

そして辿り着いた二階奥の部屋には、アレリード侯爵夫妻だけでなく、エーベルハルト伯爵夫妻も揃っていた。クロジンドの姿を見つけ、アンネゲルトは驚いたように声をかける。

「お姉様。どうしてここに？」

「帝国側の見届け役として来ましたわ。それよりも、お体は大丈夫なんですか？」

クロジンドはつい先日、アンネゲルトが疲労から熱を出した事を心配しているのだ。その後、狩猟館が爆発炎上するという事件もあった為、見舞いを遠慮していたらしい。

「ご心配おかけしました。もう大丈夫です」

狩猟館の件は大分後味の悪い結果となったが、一応決着がついた。ゆっくり休めたので体の方も問題はないと説明すると、クロジンは苦笑する。

「見たところ、確かに大丈夫そうですね。でも、油断は禁物ですよ」

「はい」

優しいクロジンのまなざしに、アンネゲルトは素直に頷いた。

「アンナ様」

そんな彼女に、ティルラが耳打ちをする。

「王太子殿下がいらっしゃる前に、侯爵ご夫妻に特区のお話をしておいた方がよろしいのでは？」

そういえばそうだ。王太子との話し合いに、その話題も出す予定でいる。この部屋にはエーベルハルト伯爵夫妻もいるし、丁度よかったではないか。

「あの、殿下とのお話の前に、私から皆さんにお伝えしたい事があります」
すると、両夫妻がアンネゲルトに注目する。

「一つ、構想がありまして、ぜひ皆さんにもお力添えをお願いしたいと思います」

アンネゲルトはそこで言葉を切つて、居並ぶ人達の顔を見た。

「国王陛下よりいただいたカールシュテイン島を、この国における魔導特区にしたいの

です。つまり、魔導を研究する者達が安心して研究を続けられるよう、特別区を作りたいと思つています」

アレリード侯爵夫妻はお互いに顔を見合わせている。エーベルハルト伯爵夫妻の方は、二人とも穏やかな笑みを浮かべていた。おそらくティルラから事前に話を聞いていたのだろう。

しばらくあつて、アレリード侯爵が質問を口にした。

「妃殿下、その特区とは具体的にはどのようなものでしょうか」

「研究へのあらゆる支援や、共同研究を行う為の研究者同士の仲立ち、彼らの生活支援などの場として考えています。魔導研究を志す者達が安心して暮らし、研究に専念出来るようにしたいのです」

スイーオネースは教会の力が強い国であり、その教会は魔導を神の教えに背くものとして禁じてきた。それだけではなく、教会は魔導に関わる者達を弾圧している。カールシュテイン島で出会い、アンネゲルトの下で働いているフィリップも、魔導研究をしてきたせいで王都を追放された身だった。

王太子とアンネゲルトの結婚を機に、国王アルベルトが魔導技術の導人に踏み切った事で、王家と教会の対立を招いたといわれている。だが、今のところ目立った衝突は見

られない。

それでも、教会がこのままである以上、魔導研究者は研究どころか、生活すらままならないだろう。そんな彼らに、安定した生活と研究の場を与えるのが一番の目的だ。

実際にどこまで研究者達に関わるかは決めていないが、その辺りはこれから詰めていけばいい。まずは賛同者を集めなくては。

この国に今までなかった「魔導の為の特別区」を作るとなれば、整えなければならぬ法案は山ほどあるだろう。それらを通す為にも、人数を集める必要があるのだ。

「越えなくてはならない壁は多いでしょう。ですが、スイーオネースに合うように研究開発された魔導技術は、将来この国の為になるはずだ」

アンネゲルトの話聞くアレリド侯爵の顔つきは、政治家のそれになっている。

「おそれながら妃殿下、そのお望みを叶えるとなると、敵を作る事になるかもしれません」

「わかっています」

「教会を敵に回すかもしれませんぞ」

「覚悟の上です」

特区として設立させてしまえば、教会とて魔導を弾圧する事は難しくなるはずだ。しかも、特区設立に関わるのが帝国の姫であるアンネゲルトとなれば、教会側も下手な動

きは出来まい。帝国と教皇庁は繋がりが深く、権力に折れないことで知られる教会も、総本山の教皇庁の意向には従う。

その考えも告げたところ、侯爵は黙り込んでしまった。

——失敗……かな……

まだ計画段階にあるせいで、かなり粗い内容になっている。もっと詰めて、きちんと説明出来る段階になってから話した方がよかつたのではないか。そう考えるアンネゲルトの背筋に嫌な汗が流れた。

革新派は、魔導技術を積極的に取り入れていこうという考えで集まった派閥なので、特区設立について賛同を得やすい人達である。

そんな革新派をまとめるのが、今、アンネゲルトの前で眉間に皺を寄せて考え込んでいるアレリド侯爵なのだ。彼を落とさなければ革新派の賛同は得られない。ここで躓くという事は、計画の失敗を意味する。

皆が固唾を呑んで見つめる中、アレリド侯爵が口を開いた。

「妃殿下が覚悟を決めていらっしゃるのであれば、私どもとしては何も言う事はありません。何よりこの国の行く末を考えてのお考え、感銘を受けました。微力ではありますが、ぜひ力添えさせていただきたく存じます」

「ありがとう、侯爵」

これで、今日の第一関門は突破した事になる。一番の難所を乗り越え、アンネゲルトはホッとしていた。

「まずは知人にもこの話を広めたいと存じますが、よろしいでしょうか？」

侯爵の言う「知人」とは、派閥の貴族を指す。

「それはありがたいのだけど、まだ計画もろくにまとまっていない状態なの」

「その件につきましては、妃殿下お一人で悩まれずともよろしいのでは？ そうした事にこそ我々をお使いいただきたい。法案に関しても、書類の作成に長けた者がおりますよ」

アレリード侯爵の申し出は嬉しかった。スイーオネースでの書類作成方法はまるでわからないので、誰かに頼る他ないのだ。

「よしなに、侯爵」

「お任せください」

これで特区の実現に一歩踏み出した。後はゴールに向けて進むだけだ。障害は多いだろうが、やり遂げなくてはならない。

——この国の為でもあるけど、自分の為でもある。

特区の設立が成功すれば自分の実績になるし、自信がつく。それは今のアンネゲルト

にとって、何より大事なものだった。

魔導特区についての話し合い後、しばらく和やかな時間を過ごしていたが、侍従が王太子の来室を告げた途端、部屋の中に緊張が走った。

「アンナ様、私達もついております。しっかりとあそばせ」

「はい」

励ましてくれたクロジンデに、アンネゲルトは頷いて答える。

自分は今後も別居婚を続けるつもりであり、愛人の男爵令嬢は好きにしてほしい。出来たら特区設立に手を貸してほしいし、そうでないならせめて邪魔をしないでほしいなど、伝えるべき内容は全て頭に入っている。

頭の中でそれらを確認していると、王太子が入ってきた。全員がその場で立って出迎える。

「殿下、お忙しい中お時間をいただきありがとうございます」

その場を代表して、アレリード侯爵が述べた。

「いや、いずれはこうせねばならなかったのだから、問題ない」

そう返した王太子ルードヴィグは、アンネゲルトの前に用意された席に腰を下ろす。

「……こんな顔をしていたっけ？」

王太子を見たアンネゲルトは内心、首を傾げた。考えてみれば、彼に会った回数は片手で足りる程度だから、記憶が薄れていても仕方ない。

改めて、前に座る名目上の夫の顔を見る。美しく整った容姿は、男性という事を忘れそうなほどだ。その秀麗な面差しに、最近よく見る姿が重なった。

「やっぱり血の繋がりがあるからか、ハルハーゲン公爵と似ているわよね。王太子の方が中性的なだけ。」

ハルハーゲン公爵は男性的な美しさがあるが、ルードヴィグは女性的だ。もっとも、眉間に皺しわを寄せた表情ではその魅力も半減しているが。

全員が着席してから、話し合いが始まった。

「まずはこちらから、よろしいでしょうか？」

そう言い出したのはアンネゲルトである。先制攻撃よろしく、言いたい事を言っておこうと思ったのだ。相手がどういうリアクションをするかを見て、対応を考えればいい。「よかるう」

身分から言えば当然なのかもしれないが、先程から繰り出される王太子の横柄おうべいな言い方が癪さかに障る。だが、今はそんな事を言っている場合ではない。

「私がこの国に来たのは、帝国と王国の架け橋となる為です。決して殿下と男爵令嬢の仲を裂く為ではありません。ですからこのまま、王宮と離宮での別居婚を続けたいと思っています。先日も国王陛下の御前で申しました通り、私は離宮から出るつもりはありません。王太子妃としての責務は果たす所存ですが、世継ぎについてはご遠慮させていただきます」

ちよこちよこ嘘が交ざっている。アンネゲルトがスイーオネースに来たのは、母との賭けに負けて帝国に帰ったところ、嫁よめぎ先が用意されていたからだ。

それに王太子妃としての責務は果たすと言いながら、世継ぎは産まないと宣言している。妃の一番の責務が世継ぎを産む事なのだから、大きな矛盾だった。

大体、アンネゲルトには結婚を継続する意思そのものがない。さすがに口にはしなかったが、いずれは婚姻無効を申請するつもりでいる。申請に配偶者の同意は不要なのだ。

そう考えつつアンネゲルトがルードヴィグの方を窺うかがうと、彼は目を丸くしてこちらを見ている。

「………何ぞ？」

アンネゲルトは首を傾げた。今の自分の発言に、そんなに驚くような部分があったのだろうか。

「あの、殿下？」

アンネゲルトに声をかけられ、ルードヴィグははっと我に返った。

「あ、ああ」

「ここまではよろしいでしょうか？」

「……まだあるのか？」

驚きから回復出来ないでいるルードヴィグに、アンネゲルトは頷く。

「実は先程侯爵夫妻にも話しましたが、カールシュティン島を魔導の特別区、魔導特区にしたいと考えています」

「魔導……特区？ 何なんだ？ それは」

「これからご説明いたします」

そう言ったアンネゲルトは、侯爵夫妻に話した内容をルードヴィグにも語って聞かせた。

「私のもとに、司教様のご命令で王都から追放された魔導研究者がいます。彼のように、政治や宗教によって魔導研究の道を閉ざされる事のない環境を整えたいのです」

「それを、何故この場で言うのだ？」

ルードヴィグの眉間の皺しわが、さらに深くなっている。おそらく、この場にいる事自体

が不愉快なのだろう。アンネゲルトとしても、話を長引かせるつもりはない。

「出来ましたら、殿下にもご助力いただきたいと思っただからですわ。ご助力いただけないというのであれば、妨害だけはしないでいただけます？」

「ばかばかしい。何故私が妨害などと。やりたければ勝手にやればいい」

「ありがとうございます！」

吐き捨てるみたいに言ったルードヴィグに、アンネゲルトは反射的に礼を述べる。どのような理由で言ったのであれ、言質げんちを取ったのだ。

王太子であるルードヴィグに妨害されれば、シャレにならない事態になるのはわかっていた。教会も手強い相手だが、次期国王であるルードヴィグもまた、敵に回すと厄介な存在になる。

アンネゲルトは、同席しているアレリード侯爵に話を振った。

「アレリード侯爵、今の殿下のお言葉、聞きましたかね？」

「はい、確かに」

笑顔で頷くアレリード侯爵に、アンネゲルトはこれで証人が得られたと安堵する。

「話はこれで終わりか？」

「ええ」

「では、もういいな」

ルードヴィグはそう言って席を立った。あつという間に部屋を出ていく背中を見送りながら、アンネゲルトは溜息を吐く。これで第二関門も突破した。

「お疲れ様でした、アンナ様」

「お疲れ様をかけたきたティルラは、笑みを浮かべている。

「これで堂々と別居出来ますわね」

クロジンデの言葉には、エーベルハルト伯爵だけでなくアレリード侯爵夫妻も笑っていた。

思っていたよりも王太子との話し合いがスムーズに終わった為、アンネゲルト達は大舞踏会開始の時間までは与えられた控え室でのんびり過ごしていた。

「いくらのおんびり出来るとは言っても、少しだらけすぎではありませんか？」

呆れた口調で言うティルラの前に、ソファでだらしなく寝転がるアンネゲルトがいた。ドレスを着たままでは皺しわになるので、クリノリンを外したコルセット姿で足をばたつかせている。

「大舞踏会が始まったら、こんな風には過ごせないんだもの。今だけ見逃してちょうだい」

どうせこの部屋には誰も入ってこないし、と続けると、ティルラの口から盛大な溜息がこぼれた。

アンネゲルトに用意された控え室は、三室が連なる広いものだ。ここはその一番奥で、誰も入らないように言い渡してある。

今部屋にいるのはアンネゲルトの他にはティルラ達側仕えと、船から連れてきた小間使いのみだ。帝国の人間だけというのも、アンネゲルトが気を抜く理由の一つだろう。

「それにしたって、下着姿などお行儀が悪すぎますよ。それに寒くないんですか？」

お風邪を召されますよ、と続けるティルラに、アンネゲルトは渋々と起き上がって、薄手の部屋着を羽織った。それでも、まだドレス姿に戻る気にはなれないらしい。

小間使い達を連れてきているので、髪型が崩れても整えてもらえる。大体、今日の髪型も高く結い上げるものではなく、後ろに軽く流している程度だ。後は髪飾りと花を付ければ終わりである。

時刻は大舞踏会開始まで一時間を切っていた。アンネゲルトもここに来て初めて知ったが、王族である彼女は開始一時間後に会場入りするのだそうだ。国王夫妻はさらにその後に会場入りする。

「実際に始まるのは、十九時半から二十時の間なのね……」